自分らしく生きるために

アピアランスケア

脱毛・皮膚症状…

外見変化を医療者支援

がん治療に伴う外見（アピアランス）の変化を抱える患者の苦痛を軽減する「アピアランスケア」に取り組む医療者を講師に迎えた公開講座が京都薬科大（京都市山科区）で開かれた。同大学卒業生で国立がん研究センター中央病院の久保晶子さん（薬剤師）が「美しさではなく、生きるための支援」というアピアランスケアの現場を語った。（稲庭篤）

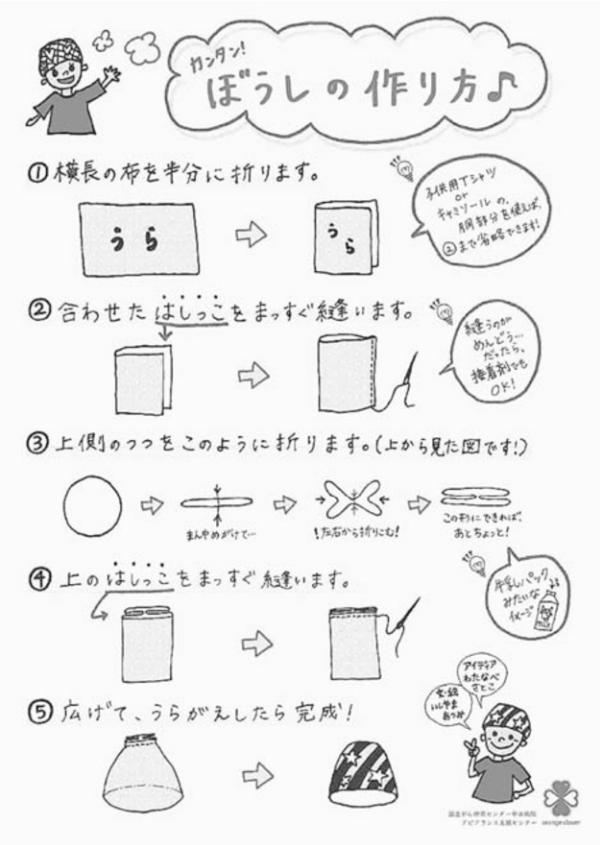
アピアランスケアは同病院の患者支援チームが提唱した造語で、医学的、整容的（姿形を整える）、心理社会的な支援によって患者の苦しみを和らげるケア。

久保さんは乳がん患者の苦痛について説明した。その最上位は「頭髪の脱毛」で、手術痕や爪の障害、むくみ、しみなど、外見に関わるさまざまな苦痛を抱えているという。

アピアランスケアは、医師や看護師、薬剤師、心理学の専門家など多職種がそれぞれの専門性を生かしてチームで患者を支援する。薬剤師の仕事としては、抗がん剤による脱毛や皮膚症状などの副作用への対応がある。抗がん剤の種類によって症状や出現時期が異なるため、薬剤に応じた対処が求められる。髪の毛への抗がん剤の影響を減らすため、頭皮を冷却しながら薬剤を静注する「頭皮クーリングシステム」も導入されている。

脱毛した患者に向けたウィッグの購入・使用についても説明した。自治体による購入助成が広がっている。手作り帽子の作り方や眉毛の描き方などを解説する同病院のリーフレットも示した。

手足の症状や皮膚障害などの治療も医学的な専門知識が欠かせない。症状を軽減する保湿剤の使用など実際の治療例を挙げ、「アピアランスケアは、自分らしい生活を送るための医療者によるケア。外見の変化で困るとき、不安や疑問があるときは、医療者に気軽に相談してください」と話した。



上は手作り帽子の作り方、下は眉の描き方を説明するリーフレット（いずれも国立がんセンター中央病院・アピアランス支援センターのサイト「患者さんへのお役立ち情報」からダウンロードできる）

京都新聞社
The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.
©京都新聞社 無断複製・転載を禁じます